

古典の日宣言十五周年記念 古典の日フォーラム2023

日時：2023年11月1日(水)午後1時～3時35分

場所：京都コンサートホール大ホール(京都市左京区下鴨畔木町1-26)

内容：総合司会 岩槻里子さん(NHK京都放送局アナウンサー)

〔第1部〕

◆テーマ曲「古典の日燦讚」と「古典の日宣言」

演奏：大谷祥子と六条山楽坊

宣言：光宗太乙愛

第14回古典の日朗読コンテスト[中学・高校生部門]大賞受賞者

◆主催者挨拶

古典の日推進委員会会長 村田純一

文化庁長官 都倉俊一

◆来賓祝辞

元衆議院議長 伊吹文明

◆古典の日宣言15周年記念メッセージ 千玄室(古典の日よびかけ人代表)

◆第38回国民文化祭「いしかわ百万石文化祭2023」との連携

メッセージ：馳浩(石川県知事)

御陣乗太鼓 御陣乗太鼓保存会



御陣乗太鼓とは？

御陣乗太鼓は、輪島市名舟町に伝わる郷土芸能。1577年、上杉謙信の軍勢が名舟に攻め込んだ際、村人が鬼気迫る面をかぶり海藻の髪を振り乱して、太鼓を打ち鳴らして退けたことが始まりと言われています。

石川県が誇る「御陣乗太鼓」は石川県指定無形文化財に指定されています。

◆光る君よりメッセージ 吉高由里子



〔第2部〕『源氏物語』源氏物語に託した紫式部の思い

◆能「源氏供養」 金剛龍謹(金剛龍若宗家)

囃子方 笛 貞光 智宣 小鼓 成田 奏 大鼓 河村 大
地 謡 宇高 竜成 宇高 徳成 山田 伊純 向井 弘記



源氏供養ができた背景に、架空の物語を作ることは、仏教における五戒の1つ「不妄語戒」に反し、作者である紫式部は死後地獄に落ちて責苦を受けなければならないという思想が鎌倉、室町時代に流布していたことがあります。安居院法印(ワキ)が石山寺へ参詣に向かう途中に、一人の女性(前シテ)に呼び止められ、「石山寺に籠って源氏物語を書いたが源氏の供養をしなかったので成仏できずにいる」と訴え、源氏の供養をしてわが亡き跡を弔ってくれと頼み、法院が供養を約束すると消え失せる。法印が石山寺に着いて供養をしていると、紫式部の霊(後シテ)が在りし日の姿で現れ、源氏物語の各帖の名を順に読み込んだ謡にあわせて舞い、人生の無常を説く。法院は、紫式部が実は石山の観世音菩薩の化現であり、源氏物語を書いたのは、夢のこの世を人に知らせるための方便だったことを悟り、能は終る。この「源氏供養」、2008年の源氏物語千年紀のプレイベントで金剛永謹二十六世宗家に演能いただき、古典の日宣言15周年にあたり金剛龍謹若宗家に舞っていただきました。

◆講演「紫式部の罪と救済」

山本淳子(京都先端科学大学人文学部教授)



仏教の守るべき5つの戒めに不妄語「嘘をついてはいけない」という教えがありました。虚構の物語は煩惱そのものであり、「源氏物語」の作者紫式部自身はどのように考えていたのでしょうか。さて、鎌倉時代の仏教説話集「宝物集」の中に源氏供養の法会がしばしば行われていたとの記述があります。紫式部は源氏物語という大きな嘘を創りあげ、その罪により地獄に落ち苦しんでいる。その助けを求める紫式部が人の夢に現れます。源氏物語にはたくさんの和歌が詠まれていて、「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事なり」と歌人にとっては大切な書物です。その作者が苦しみを受けているならどうして救わないでおられましょう、と皆が集まって供養する訳です。この宝物集の作者は平康頼は、鹿ヶ谷の陰謀に参加した罪に問われ鬼ヶ島に島流しになります。その道中、発心して僧侶となり、「世は無常で、その時にすぎるのは仏法である」と悟ります。斜面となり都に着くなり、この仏法の教えを広めずにはおられないということで宝物集を書きました。源氏供養の実例に西園寺実材母集という和歌集に源氏物語は仏法である、紫式部が源氏物語に込めた真意は嘘っぱちではなく仏法の祈りが込められているのだから、どうか紫式部を救ってください。というものです。命が明日とも知れぬ世の中で誰もが仏法にすがりたい。地獄に落ちたという紫式部の噂があるならば、なんとか極楽往生できないかという切実な思いがあったのです。また宝物集の中でも妄語にも例外があります。それは善行につながるような嘘であればそれは一つの業で、嘘をつくこともあっていい、方便というものだ、と説かれています。また紫式部は蜚蜚でいいことでも悪いことでもそれを聞いて胸におさめ難いことがある。それを文章にして人に伝えたい。本があれば、死んでしまっても私が伝えなかったことを語り伝えてくれる。それが物語なのだ。紫式部は人の死別など過酷な人生を歩んできました。人生っていったい何なののだと思った彼女は物語創へ没頭していきます。現実を踏まえつつ物語を書き進め、必ず死を迎えることを物語によって乗り越えられる。私たちの救いを求める心を満たしてくれるのが物語なのだ。源氏物語に限らず時空を超えて存在する古典は人々を感動させ、人々の心を救う働きを持っています。

◆対談「お能に見る源氏物語」山本淳子×金剛龍謹



源氏物語を題材とした能は十数番つくられています。源氏供養は物語の登場人物が出てくるのではなく紫式部が主人公で趣向が異なります。ここで紫式部は不妄語戒に反し苦しんでいます。同じように能作者も作品を生み出すのに共感があつたのではないのでしょうか。能作者は能をつくり出す時、本説を大切にします。源氏物語という優れた作品であるからこそ多くの演目を生み出されました。源氏物語を題材とした演目は鬘物と言われる優美な女性の感情を描いた演目が多く、これらを演じるには繊細な心理描写を必要とし、経験を重ね体に叩き込んでいかなければなりません。龍謹さんはこれからこういった演目に挑戦される年代に入ってこられたそうです。さて、お能は難しい！鑑賞する前に勉強をしていった方がよいのか？の質問に、舞台は生もの、同じ舞台にはなりません。その時々々の舞台の緊張空気感が能の魅力です。それを肌で感じ取り集中して観ていただくことで醸成されてくる空気感、こういったものが能を楽しむ上で欠かせないものだそうです。これまで、父の金剛永謹さんや諸先生方に素晴らしい名演を観せていただいたことで能を愛する気持ちを育ててこられました。これからはお子さんや若い人達により舞台を見せることのできる役者になれるよう精進し、一つ一つの舞台に全身全霊で取り組んでいきたい、と今後の抱負を語ってくださいました。古典は日本人の心をつないできてくれた大切なもの。古来より長い年月練り上げられてきたものが古典の魅力であり強味。その世界を魅力を伝えることができるよう精一杯活動していきます。